中京画壇関連年表

期番 利品	甲 界 画 環		
1885	西暦	和暦	中京画壇に関する出来事
1886 明治 19 久保田米穂、名古屋で仙河画堂を育く 明治 20 大本 14 大田 19	1878	明治 11	織田杏斎が『北斎漫画』15 編(完結編)に際し、足りない下絵を補うため多数の模写を行う。
1887	1883	明治 16	同好社設立(葦原眉山、木村金秋、奥村石蘭、小田切春江)
1889 明治 22 湖辺秋渓 (総) 向好社の理事に / 東京集術学校 (現東京幕術大学) 開学 1899 明治 32 同呼面会致	1886	明治 19	久保田米僊、名古屋で仙洞画塾を開く
1898 明治 31 短辺秋渓 (第) 両野社の理事に/ 商品車権が帰名 1899 明治 32 同評価会設立 現所 32 同評価会設立 現所 32 同評価会設立 現所 34 表述属門 1日本画沿革史] 刊行 1909 明治 43 東北海神区会政 (現京都市立芸術大学) 開学 第十回関西府県建合共進会開催 (村帯事業として名古屋間府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催 東海連制協会設立 田郎井竹香着「古今中京画庫」刊行/第1 回東海美術協会展 明治 45 明治 45 共正元 田郎井竹香着「古今中京画庫」刊行/第1 回東海美術協会展 明月 45 共正元 山本棒在が文度畜直具に 型井村 4 大正 3 山本棒在が文度畜直具に 型井村 5 東京 10 東京 20 東京 2	1887	明治 20	木村金秋・小田切春江が『凶荒図録』刊行
1899 明治 32 同野画会設立 同野画会設立 同野画会設立 明治 38 兼松西門 F日本画治平史』刊行 明治 42 京都市立政画専門学区 (現京都市立芸術大学) 開学 第十回開西所県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県高品陳列館で開催 東海美術協会設立 明治 43 明治 45 東京美術協会と表表 明治 45 東京美術協会と表表 明月 4 大正 3 山本梅在が文度審査員に 明月 4 大正 3 山本梅在が文度審査員に 明月 5 大正 3 山本梅在が文度審査員に 918 大正 7 愛知社結成 (川崎小虎、富田范梁) / 愛土社結成/国画創作協会総成 明月 5 大正 3 第1回愛社社展 / 同型社社展 / 同型社社協成 1919 大正 8 第1回愛社社展 / 同型社社協成 1919 大正 1 第1回愛社社展 / 同型社社協成 1922 大正 1 第1回愛社社展 / 同会社括成 1922 大正 11 第1回愛社社展 / 日島社指成 1922 大正 12 国東大震災に伴い平岩三陽が開崎に動居、石川竹部が名古屋に疎開 1924 大正 13 白島社解放・中京美術院結成 1925 大正 14 日島社解放・中京美術院結成 1925 大正 15 國田登録 古新選を設立 1926 大正 15 織田香瓷店 古新選を設立 1926 大正 15 織田香瓷店 古新選を設立 1928 昭和 3 御大典奉祀名古屋博館会開催、新規建築の部舞公園美術館で美術展開催、第今日妻子 (豊和行〈堀川》が製牌に 1928 昭和 4 名古屋市民美術展開除、第一回屋では林電票、支藤実置が専門部市長業に 松岡町丘 松岡町丘 松岡町丘 松岡町丘 松岡町丘 松岡町丘 松岡町丘 松岡町田 松岡町丘 松岡町丘 松岡町丘 松町町田 松町町田 松町町田 北町町田 北町田	1889	明治 22	渡辺秋渓(谿)京都府画学校の教師に/東京美術学校(現東京藝術大学)開学
1905 明治 38 業松蘆門『日本画治辛史』刊行 1910 明治 42 常都市立路画専門学校(現京都市立芸術大学)開学 1910 明治 43 第十回間面内景達合共議会開催、付帯事業として名古屋間内三百年紀年新古美術展覧会が愛知県両品展列館で開催 東海美術協会設立 1911 明治 44 田創井竹舎著『古今中京画位』刊行/第1回東海美術協会展 明治 45 大正元 明月 4 大正 7 製別と香城が名古屋に移住 大正元 1914 大正 7 製別社構成(川崎小虎、富田恐漢)/愛土社結成/国画創作協会結成 1919 大正 8 第1回製出社展 1921 大正 10 第1回製土社展/白色社結成 1922 大正 11 第1回製土社展/白色社結成 1922 大正 11 第1回製土社展/白色社結成 1922 大正 11 第1回製土社展/白色社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三腸が同時に転居、石川竹砂が名古屋に疎開 1924 大正 13 白島社解散、中京美術院構成 1925 大正 14 石川英ルが産業画を設立 1926 大正 15 繊田造漁扇「古高漁屋地」刊行 1928 昭和 3 都大東本路名古屋情海金開催、新緑建築の総費公園業術館で業術展開催、裏多村妻子《葦れ行〈堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回歴では林雲湖、安藤美能が専門部市長賞に 松岡映丘による講義者(新大丸線について)も開催 1930 昭和 5 総第公園美術館が名古屋市に参加・第5回製加社展で公野展開館、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 場合自然が青甲社に入塾 1933 昭和 8 名古屋市東海域協会版で無度青田本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有日が議署の絵を創画 第 2 回東海美術協会版で無度青朝線所、日本画部高直直として南池泉月を経開 1934 昭和 9 荷樹社設立、横山砲地とが開閉に「東海美術協会が名古屋市議会と美術庭建設体院情 大月、複雑公園美術館で名古屋市展開催、渡辺幾春(富着機)など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神高神陸座原の起跡総を丹羽玉邦、森村宣稿、山田秋銀、御建座原総を石川英風が担当 服都有団が松岡映丘を設生とする国画院に参加、森村福門(直)を対し、衛村直報が明治神宮外系院画館建画(歴史収穫御覧之回)を拝尾、我妻親宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋小な協会・発売画館の場を別定 2 年曜、 3 森村直服が明治神宮外系院画館建画(歴史収穫御覧之回)を拝尾、我妻和宣永が大品会を結成。 第村直報が明治神宮外系院画館建画(歴史収穫御覧之回)を拝尾、我妻相宣永が大品会を結成。 1938 昭和 13 森村直福町下の服品香造、本書屋、海東田で、東京の田本画文化協会、名古屋総合芸術展開催 1942 昭和 15 森村直福町での服田香造、株妻県、小寺県、 3 森村直尾近に 4 森は西部近、森村直帰近て 3 森村直帰近て 3 森村直帰近 3 森村直帰近て 3 森村直帰近 3 森村直帰 3 森村直帰近	1898	明治 31	渡辺秋渓(谿)同好社の理事に/藤島華僊が帰名
1909 明治 42	1899	明治 32	同好画会設立
1910 明治 43 第十回関西府県連合共連会開催、付帯事業として名古屋間府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催 東海美術協会設立 明治 45 明治 45 明治 45 明治 45 明治 45 明治 45 明別 45	1905	明治 38	兼松蘆門『日本画沿革史』刊行
東海美術協会設立 明治 44 田郎井竹香著『古今中京画垣』刊行/第1回東海美術協会展 明治 45 大正 7 朝見 45 大正 7 愛別社構成 (川崎小虎、富田池渓) / 愛土社構成 / 国画創作協会結成 1918 大正 7 愛別社構成 (川崎小虎、富田池渓) / 愛土社構成 / 国画創作協会結成 1919 大正 8 第1回愛別社展 第1回愛別社展 第1回愛別社展 第1回愛別社展 第1回愛別社展 第1回愛別社展 第1回愛別社展 第1回愛別社展 東江 10 帝居日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期登員に 1922 大正 10 阿東大震災に伴い平省三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に段間 1923 大正 12 阿東大震災に伴い平省三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に段間 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院商・	1909	明治 42	京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)開学
1911 明治 44 田郎井竹香書『古今中東画場』刊行/第1回東海美術協会展 明治 45 大正元 1914 大正 3 山本梅荘が文展審査員に 1918 大正 7 愛知社結成(川崎小虎、富田克渓)/愛土社結成/田岡創作協会結成 1919 大正 8 第1回愛知社展 1921 大正 10 帝展日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空等、朝見香城が初期設員に 1922 大正 11 第 1回愛出社展/白鳥社結成 1922 大正 11 第 1回愛出社展/白鳥社結成 1923 大正 12 阿東大震災に伴い平若三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に碑開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川映風が蓬莱画数を設立 1926 大正 15 織田舎集稿「音斎演選帖」刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲馬、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡町丘による議演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈。95 回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 場合自然が青甲社に入差 1931 昭和 7 青樹社設立、横山配生が顧問に/東海条術協会が名古屋市議会に美術度建設を陳情 「大月、錦舞公園美術館で名古屋市展開催、辺沙養春、蓄蓄製み、北崎町を展示 1934 昭和 9 青樹社設立、横山配生が顧問に/東海条術協会が名古屋市議会に美術度建設を陳情 「大月、錦舞公園美術館で名古屋市展開催、辺沙養春、蓄蓄製み、など前年の帝展入選件を展示 1935 昭和 10 熱田神宮衛速産祭の記録途を丹羽玉邦、森村宣稲、山田政衛、御彦屋祭徐巻を石川英順が担当 服部科信が松岡映丘を題まとする田画際に参加、森村富稲 山田政衛、御彦屋祭徐巻を石川英順が担当 服都科信が松岡映丘を題まとする田画際に参加、東村福門「宜永)も参加 1936 昭和 11 茶村宣福市、新田沙伊、横山砲生の三相倉展開催(愛土社解散・彩文会結成 春秋宮福町等日外経開校主要用生とする田画際に参加、東村福門「宣永)も参加 1937 昭和 12 名古屋沢本平洋平和博覧会開催 1937 昭和 12 名古屋北本洋平和博覧会開催	1910	明治 43	第十回関西府県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催
1912 大正元 朝見番城が名古屋に移住 大正元 如本梅荘が文展審査員に 2月14 大正 大正 7 安却社成成(川崎小虎、富田范渓)/ 愛土社結成/ 国画創作協会結成 第1 回愛知社展 1922 大正 10 帝展日本画がで中京出品作が全落進となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見番城が初期差員に 1923 大正 12 開東大鹿災に伴い平岩三陽が同崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英風が落葉画整を設立 1926 大正 15 織田舎逸編「香斎遺盛帖」刊行 1928 昭和 3 松田舎逸編「香斎遺盛帖」刊行 1928 昭和 3 松田舎逸編「香斎遺盛帖」刊行 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林室風、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による議議会 第大和絵について」も開催 1930 昭和 5 錦舞公園美術館が名古屋市医奇暦/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 昭合自然が青甲社に入整 第6公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 昭右 明石舎園・場合自然が青甲社に入整 第23回東海美術協会図で無鑑香訓教派、日本画部審査員として希池契月を招聘 青樹社設立、横山座生が副図に「東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 大月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、選辺幾春 (富音機) など両命の帝展入選作を展示 1936 昭和 10 熱田神宮御遊座祭の記録絵を月羽玉邦、森村宣稿・32日本語・23日本語			東海美術協会設立
1912 大正 3	1911	明治 44	田部井竹香著『古今中京画壇』刊行/第1回東海美術協会展
大正元 1914 大正3 山木梅荘が文展審音員に 1918 大正7 愛知社結成(川崎小虎、富田范渓)/愛土社結成/国甌創作協会結成 1919 大正8 第1回愛知社展 1921 大正10 帝展日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見喬城が初期登員に 1922 大正11 第1回愛土社展/白鳥社結成 1923 大正12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正14 石川英風が逐来画整を設立 1926 大正15 織田杏逸橋『杏斎遠雲転』刊行 1928 昭和3 御大典奉祝名古屋暗覧会開催、新規建築の誇舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和4 名古屋市民美術展開始、新央建築の誇舞公園美術館で美術展開館、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1930 昭和5 錦舞公園美術館が名古屋市に寄館/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 鳴谷自然が青中社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新庁舎湾成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織雲の絵を献画 第23回東海美術館公園で無盤富制御房、日本画部審査員として菊池製月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山配生が顧問に/東東美術協会が名古屋市議会に美術館建設を除情 大月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春(衛音機)など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御澤摩祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宣稲、山田秋衛、御濹摩祭絵巻を石川英風が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村福門(自永)も参加 平岩三陽、森即沙伊、横山砲生の三相章展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英屬、織田台逸、浅井正臣、近藤白風が不出品を表明(後に再出品)森村宣稲が明治神宮外嘉城、面川英屬、織田台逸、浅井正臣、近藤白風が不出品を表明(後に再出品)森村宣稲が明治神宮外嘉城、面側英圃、織民以穫御覧之図》を揮毫子我妻碧字が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋八太平学平利時覧会開催	1012	明治 45	피민주바시스 누르므와 (h
1918 大正 7 愛知社結成 (川崎小虎、富田港渓) / 愛土社結成/国画創作協会結成 1919 大正 8 第1回愛知社展 1921 大正 10 常展日本画部で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に 1922 大正 11 第1回愛土社展/白鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英側が蓬葉画塾を設立 1926 大正 15 織田舎逸場「杏斎選帯站」刊行 1928 昭和 3 御大奥奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜乡村妻子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 1930 昭和 5 鶴路自然が展門社に入塾 1931 昭和 6 総合庫然が青甲社に入塾 1931 昭和 6 総合と所が青甲社に入塾 1931 昭和 7 高台湾が前寺市社に入塾 1931 昭和 8 会合権が許事中社に入塾 1931 昭和 9 青台社設立、横山砲生が原間にノ東海美術協会が名古屋市議会に美術の映画を開催、総の映画を開催、返の機構施、日本の主席会院 第合権が設立、横山砲生が開間にノ東海美術協会が名古屋市議会に美術館場と陳晴 介力・大島の東海線を開催、原の主席を開催、返り機構造会を開催、 20世界・大島の市の市の市民入選作を展示 1934 昭和 9 青台社設立、横山砲生が高地の市の主席を開催、渡辺港・保護・経営・大島の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市の市	1912	大正元	朝兄舎城が名山座に移住
1919 大正 8 第1回要知社展 第1回要知社展 第1回要知社展 第1回要土社展/白鳥社結成 1922 大正 11 第1回要土社展/白鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川突風が蓬莱画塾を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『古希遺墨帖』刊行 3 銀大鹿 25 銀和 3 銀大鹿 25 銀和 4 名古屋市民美術展開館、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村妻子《香れ行く堀川》が銀牌に 1928 昭和 4 名古屋市民美術展開館、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村妻子《香れ行く堀川》が銀牌に 1930 昭和 4 名古屋市民美術展開館、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村妻子《香れ行く堀川》が銀牌に 1930 昭和 5 銀製公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回要知社展で公募展開館、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 場合自然が青甲社に入塾 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 23 回東海美術協会展で無鑑査制搬廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山砲生が顧問に/東海美術協会が名古屋市協会に美術館建設を陳情 大月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春 (蓄蓄橋) など前年の帝展入選件を展示 1935 昭和 10 銀田神宮御遷座祭の記録絵を月羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川突風が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村福門(宜永) も参加 平若三陽、森田沙伊、横山砲生の三相倉展開催/愛士村稲門(宜永) も参加 1936 昭和 11 平若三陽、森田沙伊、横山砲生の三相倉展開催/愛士村稲門(宜永) も参加 東石田の帝展文緒に際し、朝見香城、石川渓風、織田古逸、浅井正臣、近藤白風が不出品を表明 (後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画 (歴民収穫御覧之図) を揮毫/我妻碧字が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋別太平洋平和博覧会開催 億民収穫御覧之図) を揮毫/我妻碧字が名古屋に定住 1937 昭和 13 森村宜稲地去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 13 森村宜稲地去、森村福門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲地去、森村稲門が画号を宜永に 1942 昭和 15 森村宣稲地去、森村福門が画号を宜永に 1942 昭和 17 鏡舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化時盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋除合芸術展開催	1914	大正3	山本梅荘が文展審査員に
1921 大正 10 帝展日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に	1918	大正7	愛知社結成(川崎小虎、富田范渓)/愛土社結成/国画創作協会結成
1922 大正 11 第 I 回要土社展/白鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英風が蓬莱画塾を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴男公園美術館が名古屋市に寄贈/第 5 回要知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 嶋谷自然が各古屋市に寄贈/第 5 回要知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 嶋谷自然が青甲社に入塾 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山師生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春 (蓄音機) など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宣稲、山田秋衛、御選座祭絵を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村宣稲、山田秋衛、御選座祭絵を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村町代 「宣永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山配生の三相會展開催/要土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白風が不出品を表明(後に再出品) 森村宣稲が明治神宮外苑絵画館壁画 《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋八太平洋平和博覧会開催 農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1938 昭和 13 森村宣稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宣稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村直永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化部邸話成、構成団体の一つに愛知日本画文が協会、名古屋総合芸術展開催	1919	大正8	第1回愛知社展
1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英風が蓬莱画整を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門郎市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に奇贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 嶋合自然が青甲社に入整 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23 回東海美術協会展で無鑑査制散席、日本画郎審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 南樹社設立、横山師生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 大月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春 (蓄音機) など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宣稲、山田秋衛、御遷座祭絵を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村町代 (資永) も参加 1936 昭和 11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宣稲が明治神宮外苑絵画館壁画 (農民収穫御覧之図)を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 2日、日本国、森村宣和近去、森村福門が画号を直永に 1940 昭和 15 森村宣稲町下の服即有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村直永が大稲会を結成。 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服即有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市殿賛文化聊盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋総合芸術展開催	1921	大正 10	帝展日本画部で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に
1924 大正 13 白鳥壮解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英鳳が蓬莱画整を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 嶋谷自然が青甲社に入整 23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 黎田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村官稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和 11 平若三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宣稲が明治神宮外苑絵画館整画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋凡太平洋平和博覧会開催 21938 昭和 13 森村宮稲坊、森村稲門が画号を直永に 1940 昭和 15 森村宮稲町の展部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宣永が大稲会を結成。 1940 昭和 15 森村宮稲竹の原部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宣永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市賞賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1922	大正 11	第 I 回愛土社展/白鳥社結成
1925 大正 14 石川英鳳が蓬莱画塾を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第 5 回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 昭和 6 場合自然が青甲社に入塾 名古屋市所舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山砲生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春 《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 駅田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山砲生の三相倉展開催/愛土社解散・彩交会結成 市限和11 平岩三陽、森田沙伊、横山砲生の三相倉展開催/愛土社解散・彩交会結成 市限和11 平岩三陽、森田沙伊、横山砲生の三相倉展開催/愛土社解散・彩交会結成 市成和に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画 (農民収穫御覧之図)を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 森田本語、森村福門が画号を直永に 34 34 34 34 34 34 34 3	1923	大正 12	関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開
1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第 5 回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 幅合自然が青甲社に入塾 名古屋市所含含落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宮稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宣永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宮稲が明治神宮外苑絵画館壁画 《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1940 昭和 15 森村宮稲逝去、森村稲門が画号を直永に 1940 昭和 15 森村宮稲逝去、森村稲門が画号を直永に 1940 昭和 15 森村宮稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼玉、喜多村光穂(麦子)、森村宮永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1924	大正 13	白鳥社解散、中京美術院結成
1928 昭和3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に	1925	大正 14	石川英鳳が蓬莱画塾を設立
1929 昭和4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 宮和吉宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村福門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋沢太平洋平和博覧会開催 1940 昭和15 森村宜稲町下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1926	大正 15	織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行
松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熟田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 2回13 2回13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲町下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1928	昭和 3	御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に
1930 昭和5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲町下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1929	昭和4	名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に
1931 昭和 6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山砘生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和 11 平岩三陽、森田沙伊、横山砘生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1940 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催
1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画第23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宣永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1930	昭和 5	鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に
第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和 11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1931	昭和6	嶋谷自然が青甲社に入塾
1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 大月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1933	昭和8	名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画
六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画 《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘
1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1934	昭和 9	青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情
服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示
1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1935	昭和 10	熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当
帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加
森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1936	昭和 11	平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成
1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)
1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住
1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1937	昭和 12	名古屋汎太平洋平和博覧会開催
1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1938	昭和 13	森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に
	1940	昭和 15	森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成。
1943 昭和 18 第 6 回新文展で我妻碧宇《林間》が中京在住日本画家初の特選に	1942	昭和 17	鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催
	1943	昭和 18	第6回新文展で我妻碧宇《林間》が中京在住日本画家初の特選に



名古屋市美術館

常設企画展 近代名古屋の日本画界

令和7年(2025)9月27日(土)~12月7日(日)

【前期】9月27日(土)~11月3日(月·祝) 【後期】11月5日(水)~11月27日(日)

明治維新によって、日本画は急速な近代化の波に襲われました。その中心となった東京・京都に対して、中京地域は東西の影響を受けながらも、しばらくは江戸からの連続を引き継ぐかたちで推移していきました。その中心となったのが、明治 16 年(1883)に結成された日本画団体・同好社(明治 31 年 [1899] に同好画会と改称)でした。愛知県博物館内の龍影閣を拠点とした同好社(同好画会)は、定期的な展覧会だけでなく、東西の画家を招聘しての共進会などを主催するなど、中京地域の美術団体として中心的な役割を果たしました。

そうした状況に転機が訪れたのが、明治 43 年 (1910) の第十回関西府県連合共進会と、その付帯事業として開催された名古屋開府三百年紀念新古美術展覧会でした。新古美術展は、当初は同好画会展として企画されましたが、同年に落成した愛知県商品陳列館を借用するにあたり、借用料を無料にする条件として全ジャンルの美術品の展示を提示されたことから、古美術、洋画、工芸などを含めた総合美術展として開催されることになりました。なお、この時に古美術分野で尾張徳川家の宝物が多数展示されたことが、昭和5年(1930)の徳川美術館開館の契機の一つとなりました。新古美術展を期に、同好画会は洋画、工芸分野を加えた日本初の民間総合美術団体「東海美術協会」へと発展的解消をしました。東海美術協会は愛知県商品陳列館内に事務所を置き、毎年公募展を開催するだけでなく、古美術や西洋美術の展覧会・講演会を企画運営するなど、戦前の中京地域の美術界を長く支えた美術団体でした。

本展では、全体を二章に分け明治末期から昭和初期までの中京地域 の日本画界を総覧し、中京画壇がいかにして近代化の道を辿っていっ たかを見ていきます。

第一章「名古屋開府三百年と中京画壇の成立」では、名古屋開府三百年紀念新古美術展覧会に出品した日本画家たちを中心に紹介します。 一部を除き、現在ではほとんど知名度に乏しい画家ばかりですが、当時はこうした画家たちが精力的に活動し、中京地域の美術界を盛り立てていました。

第二章の「東海美術協会と次世代の日本画家たち」では、新古美術展覧会を機に結成された日本初の総合美術団体・東海美術協会の活動と、大正・昭和戦前期に名古屋を中心に活躍した次世代の日本画家たちを紹介します。また、中京画壇発展の大きな契機となった昭和3年(1928)の御大典奉祝名古屋博覧会の資料など、当時の中京画壇を取り巻く状況がわかる資料も併せて展示します。

本展で紹介する画家の中には、名古屋市美術館で初めて取り上げる画家も少なくありません。およそ百年前の名古屋を中心に活躍した日本画家たちの作品によって、当時の名古屋の日本画界の様子に思いを馳せていただければ何よりです。

最後になりましたが、本展の開催にあたり、貴重な作品を快くご出品いただきました、鱓庵コレクションをはじめとした所蔵者の皆様、ならびに展覧会実現のためにご協力を賜った関係者各位に心から感謝申し上げます。

第一章 名古屋開府三百年と中京画壇の成立

本章では、明治 43 年(1910)に開催された「名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会」の目録に名前が見える日本画家を中心に紹介していきます。紹介する画家の多くは同好社(同好画界)と後継団体である東海美術協会に所属していました。

奥村石亭は明治期の中京日本画壇で中心的な役割を担った四条派の画家・奥村石蘭の長男です。小寺雲洞もまた石蘭に学んだ画家であり、新古美術展では石亭と共に審査員を務めました。同じく審査員の渡邊秋渓(谿)は久保田米僊が来名時に開いた仙洞画塾を引き継ぎ、藤島華僊はその補佐をしました。米僊に学び、名古屋で活動した画家として他に大矢米年がいます。

中京地域では他にも江戸時代の中京画家たちの伝統を引き継いだ画家がいました。山本梅逸、中林竹洞に私淑した毛利梅友は、田能村直入に師事し、後に日本中央南宗画会を立ち上げました。兼松蘆門は四条派、南画を修めただけでなく、『日本画沿革史』といった研究書を執筆するなど、研究者としての側面を持つ画家です。さらに、当時の中京地域で精力的に活動したのが張月樵の孫弟子である織田杏斎を中心とした南北合派です。甥の織田旦斎、弟子の石河有粼など、師の杏斎の画風を引き継いだ画家や、石河の弟子で東西の近代化の傾向を早期に取り入れた水谷芳年といった画家が活躍しました。

他に、徳川美術館初代館長・熊沢五六の父で、医業の傍ら独学で日本画を学んだ熊沢古篷、四条派、南北合派を学び、鹿を得意とした波多野一岳、池上秀畝に学び鯉を得意とした松田杏亭、同じく秀畝に学び鶴を得意とした狩野梅斎など、この時期の中京地域では様々な日本画家が活動していました。

また、中京画壇を語る上で欠かせないのが、森村宜稲を中心とした復古やまと絵の系列と、山本梅荘を中心とした梅荘派の系列です。森村宜稲は田中訥言、浮田一蕙に私淑し復古やまと絵の伝統を引き継ぎ、稲香画塾を開き多くの弟子を育てました。その弟子の中には第二章で取り上げる森村稲門(宜永)、林雲鳳、山田秋衛などがいます。梅荘派については、今回は作家・作品を取り上げることはできませんでしたが、半田を拠点に活動した南画系の画家一派で、中京地域で大きな影響力を持ちました。また梅荘自身も大正3年(1914)から文展の審査員を務めるなど、全国的にも存在感を放ちました。

こうした日本画家たちの多くは東海美術協会に所属し活動を展開しました。東海美術協会は民間団体ではありますが、会長を愛知県知事、副会長を商工会議所会頭が務め、名古屋市が補助金を出すなど、現在でいう第三セクターに近いものでした。明治 44 年(1911)から開催された東海美術協会展は、官展の中京地域版とでも言うべき性格を持つものであり、東海美術協会の発足により中京画壇の基礎が整ったと言えるでしょう。また同年には、江戸時代以降の中京地域の美術を日本画家中心に流派ごとに紹介した『古今中京画談』(第二章で展示)が刊行され、中京地域の美術界は大きな盛り上がりを見せました。

しかし、明治未時点では、中京画壇の近代化は限定的なものでした。 中京画壇の本格的な近代化の時期は、大正7年(1918)に結成された 愛知社、愛土社(第二章で紹介)が本格的に名古屋で展覧会を開催した、 大正後期ごろに置くことができるでしょう。

第二章 東海美術協会と次世代の日本画家たち

明治 43 年(1910)に発足した東海美術協会は、毎年の公募展以外にも古美術の展覧会や講演会などを定期的に開催するなど、中京地域の美術振興に大きな役割を果たしました。一方で、この時期の名古屋には美術学校が存在せず、中京地域の日本画家志望の若者は、多くが明治42 年(1909)に開学した京都市立絵画専門学校に進学しました。初期の中京圏からの進学者には、在学中に文展に三回連続入選し、若くして台頭を表しながらも大正10年(1921)に早逝した水野清亭がいました。

この時期の中京画壇で大きな役割を果たした画家として、大正元年 (1912) に姫路から名古屋に移住した朝見香城がいました。竹内栖鳳の門下である森月城や西山翠嶂に日本画を学んだ朝見は、大正 5 年から東海美術協会展の審査員を務め、また、東海美術協会の事務局に併設された中京文展出品協会(大正 8 年からは帝展)では理事を務めるなど当時の中京画壇を牽引した若手画家でした。しかし、中京画壇全体を見ると、大正 10 年の第 3 回帝展では、中京地域からの出品作が全て落選するなど、中京画壇の東西に対する遅れが顕在化していきました。

こうした中京地域の停滞を打破した絵画団体の一つが、佐藤空鳴、織田杏逸、石川英鳳といった京都市立絵画専門学校の中京出身者たちが結成した愛土社でした。大正7年(1918)結成の愛土社は、大正十年に名古屋市内で初の展覧会を開催しました。愛土社には近藤白鳳、大岩聚星、浅井正臣といった同校の後輩も参加しました。彼らの多くは卒業後に帰郷し、東海美術協会にも所属しながら活動をしました。また、朝見香城も大正11年(1922)に土田麦僊門下の喜多村麦子、

山元春挙門下の渡辺幾春、独学で日本画を学んだ横山葩生らと白鳥社を結成、翌大正 12 年には愛土社の近藤白鳳、織田杏逸を加え中京美術院を結成しました。こうした当時 20~30 代の画家たちの台頭により、中京画壇は急速に近代化を遂げることになりました。彼らの多くは、中京地域で活動しながら、京都の西山翠嶂の画塾・青甲社にも所属していました。

一方で、当時の若手日本画家は東京に学ぶことも少なくありませんでした。大正七年(一九一八)に愛知県出身の在京画家を中心に結成された愛知社が、帝展の気風を定期的に名古屋に伝えたのもその一因でしょう。愛知社の日本画同人としては、池上秀畝門下の富田范渓、松岡映丘門下の服部有恒、森村稲門(宜永)、川合玉堂門下の清水有聲などがいました。こうした画家たちは東京をその活動の中心(森村は戦後、東京・名古屋を往来しながら活動)としましたが、例えば池上秀畝門下では前章で紹介した松田杏亭、松岡映丘門下では森村稲門(宜永)、林雲鳳、山田秋衛、川合玉堂門下では平岩三陽のように、帰郷して活動した画家も少なくありませんでした。特に林や山田は、歴史画制作のために培った有職故実の知識を活用し、戦後の名古屋市の文化財行政にも携わりました。

大正後期以降、中京画壇は急速に発展を遂げますが、中京地域には依然として専門の展示施設としての美術館がありませんでした。そうした状況に変化が訪れるのが昭和3年(1928)に開催された御大典奉祝名古屋博覧会でした。この時、パビリオンの一つとして中京地域初の美術館が建設され(鶴舞公園美術館)、博覧会終了後も巡回展や公募展の会場として重要な役割を果たしました。翌昭和4年には名古屋市主催の名古屋市民美術展が発足するなど、中京美術界はますますの盛り上がりを見せるようになりました。

第一章 作品リスト

第一早	作品リスト						
番号	作者	作品名	所蔵	制作年和暦	制作年西暦	品質	期間
資料 1		第十回関西府県連合共進会全図	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
資料 2		名古屋案内	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
資料 3		新古美術展覧会案内図	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
資料 4		絵葉書	個人蔵	明治 43 年	1910	印刷物	通期
1	織田杏斎	桐隠読書図	鱓庵コレクション	明治 35 年	1902	絹本墨画淡彩	通期
2	石河有粼	巌上孔雀図	名古屋市美術館	大正 12 年	1923	絹本着彩	通期
3	水谷芳年	花鳥図屏風	名古屋市美術館	大正	1920c.	絹本着彩	通期
4	渡辺秋渓(秋谿)	富岳憧憬之一白糸瀑布図	鱓庵コレクション	明治 44 年	1911	絹本墨画淡彩	通期
資料 5	渡辺秋渓 (秋谿) 著	富岳百景画譜	個人蔵	明治 41 年	1908	書籍	通期
5	藤島華僊	羅漢図	鱓庵コレクション	大正7年	1918	絹本着彩	通期
6	大矢米年	呉道玄筆画龍上天図	鱓庵コレクション	大正 13 年	1924	絹本着彩	通期
7	兼松蘆門	梅林之図	鱓庵コレクション	明治 44 年	1911	絹本墨画淡彩	通期
資料 6	兼松蘆門 著	日本画沿革史	個人蔵	明治 38 年	1905	書籍	通期
		竹田と華山	個人蔵	明治 37 年	1904		
		竹洞と梅逸	名古屋市美術館	明治 44 年	1911		
8	小寺雲洞	雨中渡船図	鱓庵コレクション	大正~昭和	1910~20c.	絹本着彩	通期
9	奥村石亭	月次山水図屏風	名古屋市美術館	大正	1910c.	紙本墨画淡彩	通期
10	熊沢古篷	勁翮排霜図(鷹野猛威)	名古屋市美術館	昭和2年	1927	絹本着彩	通期
11	毛利梅友	玉野霜暁	個人蔵	大正~昭和	1920~30c.	絹本着彩	通期
12	松田杏亭	双鯉図	名古屋市美術館	戦後	1950c.	絹本着彩	通期
13-1	波多野一岳	新緑之図	鱓庵コレクション	大正~昭和	1920~30c.	絹本着彩	前期
13-2	狩野梅斎	梅花双鶏図	鱓庵コレクション	大正~昭和	1920~30c.	絹本着彩	後期

第二章 作品リスト

番号	作者	作品名	所蔵	制作年和暦	制作年西暦	品質	期間
資料 1	田部井竹香 著野崎華年 装丁	古今中京画談	個人蔵	明治 44 年	1911	書籍	通期
資料 2	東海美術協会編	東海秀美帖 前期:狩野梅斎/大岩聚星 後期:青木栖古/横山葩生	名古屋市美術館	昭和4年	1929	紙本着彩前後期入替	通期
資料 3		第 19 回東海美術協会展覧会目録	個人蔵	昭和4年	1929	印刷物	通期
1-1	水野清亭	春麗	名古屋市美術館	大正4年	1915	絹本着彩	前期
1-2	石川竹邨	初夏竹垣遊禽図屛風	個人蔵	大正	before1923	絹本着彩	後期
2-1	佐藤空鳴	晚春(分譲地風景)	名古屋市美術館	昭和4年	1929	絹本着彩	前期
2-2	大岩聚星	春趣二題	鱓庵コレクション	大正 15 年	1926	絹本着彩	後期
3	織田杏逸	葡萄之図	鱓庵コレクション	昭和5年頃	1930c.	絹本着彩	通期
4	近藤白鳳	葉蔭育雛	鱓庵コレクション	大正~昭和	1924~27c.	絹本着彩	通期
5	浅井正臣	叭々鳥	鱓庵コレクション	昭和10年頃	1935c.	紙本墨画淡彩	通期
6	石川英鳳	紅花白鳥	鱓庵コレクション	昭和2年	1927	絹本着彩	通期
7	朝見香城	海苔採り	鱓庵コレクション	大正14年頃	1925c.	紙本着彩	通期
8	横山葩生	晴れたる日	名古屋市美術館	昭和 11 年	1936	紙本着彩	通期
9	渡辺幾春	蓄音機	名古屋市美術館	昭和8年	1933	絹本着彩	通期
10	喜多村麦子	暮れ行く堀川	名古屋市美術館	昭和3年	1928	絹本着彩	通期
資料 4		御大典奉祝名古屋博覧会鳥瞰図	個人蔵	昭和3年	1928	印刷物	通期
資料 5		御大典奉祝名古屋博覧会絵葉書	個人蔵	昭和3年	1928	印刷物	通期
資料 6		御大典奉祝名古屋博覧会美術展 出品目録	個人蔵	昭和3年	1928	印刷物	通期
資料 7		御大典奉祝記念菓子皿 (日本陶器 [現:ノリタケカンパ ニーリミテド] 製)	個人蔵	昭和3年	1928	陶器	通期
資料 8		《暮れ行く堀川》陳列通知	名古屋市美術館	昭和3年	1928	印刷物	通期
資料 9		《暮れ行く堀川》絵葉書	名古屋市美術館	昭和3年	1928	印刷物	通期
11	富田范渓	麦畑	名古屋市美術館	昭和8年頃	1933c.	絹本着彩	通期
12-1	平岩三陽	山は粧ふ	名古屋市美術館	昭和 12 年	1937	紙本着彩	前期
12-2	清水有聲	椿咲く島	名古屋市美術館	大正9年	1920	絹本着彩	後期
13-1	林雲鳳	玄上	名古屋市美術館	昭和4年	1929	絹本着彩	前期
13-2	服部有恒	業平観梅	名古屋市美術館	昭和5年頃	1930c.	紙本着彩	後期
14-1	山田秋衛	竜宮城図屏風	名古屋市美術館	昭和2年頃	1927c.	絹本着彩	前期
14-2	森村稲門(宜永)	合戦図	名古屋市美術館	昭和前半	1920-30c.	紙本着彩	後期

関連イベント

コレクション解析学「東海美術協会の日本画家たち」

東海美術協会の画家たちが熊沢古篷(1861-1934)のために描いた画帖 「東海秀美帖」から、当時の中京画壇を掘り下げていきます。

日時:11月29日(土) 14:00~15:30(約90分)

講師:近藤将人(当館学芸員) 会場: 名古屋市美術館 2 階講堂

定員:180名(当日先着順、定員になり次第締切)

料金:無料

解説リーフレット

本企画展の開催に合わせて、名古屋市美術館の中京画壇コレクショ ンを紹介するリーフレットを作成しました。常設企画展会場およびコ レクション解析学の会場で配布しますが、部数に限りがあります。

公式ホームページで電子版を公開していますので、可能な限り電子 版での閲覧にご協力ください。下記の二次元バーコードからもアクセ スできます。ページ内にある「解説リーフレット」のボタンから閲覧く

ださい。

中京画壇関連年表

期間 利曜 利曜 利用 利用 利用 利用 利用 利用	甲 界 画		
1885	西暦	和暦	中京画壇に関する出来事
1886 朝労 19 久保田米徳、名古屋で仙河画型を何く 秋日 20 大白秋・小田の青江が「12 院庭院」刊行 明治 22 超辺災災(第) 両が社の理事に「毎年帯で押名 現土 20 現土 20 20 20 20 20 20 20 2	1878	明治 11	織田杏斎が『北斎漫画』15 編(完結編)に際し、足りない下絵を補うため多数の模写を行う
1887	1883	明治 16	同好社設立(葦原眉山、木村金秋、奥村石蘭、小田切春江)
1889	1886	明治 19	久保田米僊、名古屋で仙洞画塾を開く
1898 明治 31 短辺秋渓 (窓) 両好社の理事に/藤島華権が帰名 明治 32 同野語会設立 明治 38 兼松瀬門 1日本画沿革史] 刊行 1909 明治 38 兼松瀬門 1日本画沿革史] 刊行 1910 明治 43 兼北海門 1日本画沿革史] 刊行 1910 明治 43 第十四関西府良達合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催 東連書網路会設立 田部井竹書著「古今中京画短』刊行/第1 回東海美術協会展 明治 43 田部井竹書著「古今中京画短』刊行/第1 回東海美術協会展 明決 45	1887	明治 20	木村金秋・小田切春江が『凶荒図録』刊行
1899 明治 32 同野画会設立 1905 明治 38 兼松電門 日本画治平史』刊行 1910 明治 42 京都市立協画専門学区(現京都市立芸術大学)開学 第十回側直所県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が受知県高品煉列館で開催 東海美術協会設立 1911 明治 44 田郎井竹書著『古今中京画型』刊行/第1回東海美術協会展 明治 45	1889	明治 22	渡辺秋渓(谿)京都府画学校の教師に/東京美術学校(現東京藝術大学)開学
1905 明治 38	1898	明治 31	渡辺秋渓(谿)同好社の理事に/藤島華僊が帰名
1909 明治 42 京都市立絵画専門学校 (現京都市立芸術大学) 陪学 1910 明治 43 第十回関西病児連合共進会開催、付帯事業として名古層開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催 東海美術協会設立 田部井竹書著『古今中原画理』刊行/第1回東海美術協会展 明治 44 田部井竹書著『古今中原画理』刊行/第1回東海美術協会展 明治 45 示正 郊見書城が名古屋に移住 元正 郊見書城が区居審直員に 京田 京田 京田 京田 京田 京田 京田 京	1899	明治 32	同好画会設立
1910 明治 43 第十回関西府県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品線列館で開催 東海美術協会設立 明治 44 明治 44 明治 44 明治 45 明別 44 明治 44 明治 45 明別 45	1905	明治 38	兼松蘆門『日本画沿革史』刊行
明治 44 田郎 井竹香著「古今中京画垣」刊行/第1回東海美術協会展	1909	明治 42	京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)開学
1911 明治 44 田郎井竹香著『古今中東画唱』刊行/第1回東海美術協会展 明治 45 大正元 日	1910	明治 43	第十回関西府県連合共進会開催、付帯事業として名古屋開府三百年紀年新古美術展覧会が愛知県商品陳列館で開催
1912 大正名 切見番域が名古屋に移住 大正名 山本梅荘が文展音音員に 少工 公工 少工 公工 公工 公工 公工 公工			東海美術協会設立
1912 大正元 切本梅荘が文展審音員に 安如社結成 (川崎小虎、富田范渓) / 愛土社結成 / 国画創作協会結成 第1回愛知社展 第1回愛知社展 第1回愛知社展 第1回愛知社展 第1回愛知社成 / 四月 第1回愛知社成 第1回愛知社成 第1回愛知社成 / 四月 第1回蒙古社成 / 四月 第1回蒙古社居 / 四月 第1回蒙古社居 / 四月 第1回蒙古社居 第1回蒙古社居 / 四月 第1回蒙古法院 / 四月 四月 第1回蒙古法院 / 四月 四月 四月 第1回蒙古法院 / 四月 四月 四月 四月 四月 四月 四月 四月	1911	明治 44	田部井竹香著『古今中京画壇』刊行/第1回東海美術協会展
大正元 1914 大正3 山本梅荘が文展審音員に 1918 大正7 愛知社結成(川崎小虎、富田范渓)/愛土社結成/国画創作協会結成 1919 大正8 第1回愛知社展 1921 大正10 帝展日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見喬城が初期塾員に 1922 大正11 第1回愛土社展/白扇社結成 1923 大正12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正13 白扇社解散、中京美術院結成 1925 大正14 石川英風が選挙画数を設立 1926 大正15 福田杏逸属『杏斎遮曇帖』刊行 1928 昭和3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の誇舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《費れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和4 名古屋市民美術展開始、新央建築の誇舞公園美術館で美術展開館、喜夕村麦子《費れ行く堀川》が銀牌に 1930 昭和5 錦舞公園美術館が名古屋市に寄創/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 崎谷自然が青中社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新介舎添成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を紋画 第23回東海美術館会展で無盤富制拠院、日本画部審査員として菊池製月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山砲生が顧問に/東東美術協会派と古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝原開催、渡辺幾春(廣音機)など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御憑摩察の記録絵を丹羽玉邦、森村宣稲、山田秋衛、御濹座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村福門(直永)も参加 平岩三陽、森即沙伊、横山砲生の三相倉展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白風が不出品を表明(後に再出品)森村宣稲が明治神宮外売越画館整画(原民収穫御覧と図》を揮毫了我妻碧字が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋小太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宣稲が明治寺宮外院・藤県、成野田13 森村宣稲が明治寺宮外院・藤県、藤田13 森村宣稲が明治寺宮外庭画館整画(原民収穫御覧と図)を揮毫了我妻君字が名古屋に定住 1938 昭和13 森村宣稲が日本の三成郎時恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宣永が大稲会を結成 1942 昭和15 森村宣稲町の殿部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜夕村光穂(麦子)、森村宣永が大稲会を結成	1010	明治 45	
1918 大正 7 愛知社結成 (川崎小虎、富田港渓) / 愛土社結成/国画創作協会結成 1919 大正 8 第 1 回愛知社展 1921 大正 10 帝展日本画部で中京出品作が全落遠となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期整員に 1922 大正 11 第 1 回愛土社展/白鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名占屋に疎開 1924 大正 13 自島社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 田川東山が蓬莱画塾を設立 1926 大正 15 織品咨詢「香斎選率站」刊行 1928 昭和 3 御大興奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村妻子《器れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲風、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴路日の展が清明社に入塾 1931 昭和 6 崎谷自然が青甲社に入塾 1931 昭和 6 崎谷自然が清中社に入塾 1931 昭和 7 青樹社設立、横山砲生が原門と一東海美術協会が名古屋市高海に美術の株園・本の新皮の緑を配園 第23 回東海美術協会展で無鑑者制施、日本画部部書員として菊池契月を開作 第23 回東海美術協会展示機能を動物が、大川麻野が型具内を経済 第23 回東海美術協会展示機能を設定した。 1934 昭和 9 青樹社設立、横山砲生が開間にノ東海美術協会が名古屋市議会に美術館機と など前年の帝展入選作を展示 大月 20 京都和日の帝展の主義を設定した。 1935 昭和 10 熱田神宮部運発の記録を登録を作るとお屋市展開催、渡辺幾春(富着機)など前年の帝展入選作を展示 ・大月 20 京都・日本会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会会	1912	大正元	朝兄舎城が名山座に移住
1919 大正 8 第1回要知社展 1921 大正 10 帝展日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に 1922 大正 11 第1回要土社展/自鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が回崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 自島社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英順が護薬画塾を設立 1926 大正 15 總田杏逸編『古香道墨帖」刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜乡村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1928 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 観報台自然が青甲社に入塾 1931 昭和 6 嶋合自然が青甲社に入塾 1931 昭和 6 嶋合自然が青甲社に入塾 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有信が織豊の絵を献画 第 23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山範生が織門に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名口服舎房間催、渡辺映善の審査機として菊池契月を招聘 1935 昭和 10 熱田神宮御遺座祭の記録絵を刊羽玉邦、森村宣稲、山田秋衛、御遺座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村福門(国永) も参加 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏漁、浅井正原、近崎白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宣稲が明治神宮外苑絵画館壁画(農民収穫御覧之図)を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋別太平洋平和博覧会開催 銀村宣稲地去、森村宣稲地去、森村福門が画号を直永に 1938 昭和 13 森村宣稲地去、森村福門が画号を直永に 報刊な明本が大稲会を結成 1940 昭和 15 森村宣稲地子、森村電稲町での服部有に、林雲鳳、小寺礼三、喜乡村光穂 (麦子)、森村宣永が大稲会を結成 1942 昭和 17 線別公園美術館が解体/名古屋市裏村での服部有に、林雲県	1914	大正3	山本梅荘が文展審査員に
1921 大正 10 帝展日本画郎で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に 1922 大正 11 第 1 回要士社展/白鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英鳳が蓬莱園整を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遠豊帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博園会房開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜乡村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、新規建築の鶴舞公園美術館で事門部市長賞に 1930 昭和 5 鶴舞公園美術展的名古屋市民会議について」も開催 1930 昭和 6 総会自然が青中社に入整 1931 昭和 6 総合自然が青中社に入整 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家+名が名古屋布議会所統、松岡峡丘・服部有恒が議豊の絵を献画 1934 昭和 9 青樹社設立、横山砲生が顧問に/東美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情	1918	大正7	愛知社結成(川崎小虎、富田范渓)/愛土社結成/国画創作協会結成
1922 大正 11 第 1 回要土社展/白鳥社結成 1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英風が蓬莱園塾を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺里帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第 5 回要知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 幅ら自然が青甲社に入塾 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 2 3 回東海美術協会展で無鑑査制撤係、日本画部審査員として菊池契月を招聘 青樹社設立、横山師生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾善 (番音機) など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宣稲、山田秋衛、御遷座祭絵を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村宣稲、山田秋衛、御遷座祭絵を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村町(宣永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山砲生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宣稲が明治神宮外苑絵画館壁画《展民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1940 昭和 13 森村宣稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服郎有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化部盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋総合芸術展開催	1919	大正8	第1回愛知社展
1923 大正 12 関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開 1924 大正 13 白鳥社解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英風が蓬莱画整を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門郎市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴野公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 嶋合自然が青甲社に入塾 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制放係、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 南樹社設立、横山晒生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春 (番音機) など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御達座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御護座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村町代 (宣永) も参加 1936 昭和 11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画 (農民収穫御覧之図)を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋小太平洋平和博覧会開催 2日、銀田・本美・大田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田・田	1921	大正 10	帝展日本画部で中京出品作が全落選となる/青甲社設立、佐藤空鳴、朝見香城が初期塾員に
1924 大正 13 白鳥壮解散、中京美術院結成 1925 大正 14 石川英鳳が蓬莱画整を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺譽帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館盤画 《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋凡太平洋平和博覧会開催 2日、東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東京・東	1922	大正 11	第 1 回愛土社展/白鳥社結成
1925 大正 14 石川英鳳が蓬莱画塾を設立 1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に	1923	大正 12	関東大震災に伴い平岩三陽が岡崎に転居、石川竹邨が名古屋に疎開
1926 大正 15 織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行 1928 昭和 3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に 1929 昭和 4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和 5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和 6 邮谷自然が青甲社に入塾 名古屋市所含落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宣永) も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画 (農民収穫御覧之図) を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を直永に 1940 昭和 15 森村宜稲町下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1924	大正 13	白鳥社解散、中京美術院結成
1928 昭和3 御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に	1925	大正 14	石川英鳳が蓬莱画塾を設立
1929 昭和4 名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に 松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 嶋谷自然が青甲社に入塾 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋別太平洋平和博覧会開催 1940 昭和15 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1940 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1926	大正 15	織田杏逸編『杏斎遺墨帖』刊行
松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催 1930 昭和5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 黙田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村福門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 2回 2回 2回 2回 2回 2回 2回 2	1928	昭和 3	御大典奉祝名古屋博覧会開催、新規建築の鶴舞公園美術館で美術展開催、喜多村麦子《暮れ行く堀川》が銀牌に
1930 昭和5 鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に 1931 昭和6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画 第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1929	昭和4	名古屋市民美術展開始、第一回展では林雲鳳、安藤美霊が専門部市長賞に
1931 昭和 6 嶋谷自然が青甲社に入塾 1933 昭和 8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和 11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1940 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			松岡映丘による講演会「新大和絵について」も開催
1933 昭和8 名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画第23回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宣永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1930	昭和 5	鶴舞公園美術館が名古屋市に寄贈/第5回愛知社展で公募展開始、中京在住作家も出品可能に
第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘 1934 昭和 9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和 11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1931	昭和6	嶋谷自然が青甲社に入塾
1934 昭和9 青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情 六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1933	昭和8	名古屋市新庁舎落成記念に在中京帝展日本画家十名が名古屋名所絵、松岡映丘・服部有恒が織豊の絵を献画
六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示 1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画 《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			第 23 回東海美術協会展で無鑑査制撤廃、日本画部審査員として菊池契月を招聘
1935 昭和 10 熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当 服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1934	昭和 9	青樹社設立、横山葩生が顧問に/東海美術協会が名古屋市議会に美術館建設を陳情
服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加 1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成 帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			六月、鶴舞公園美術館で名古屋帝展開催、渡辺幾春《蓄音機》など前年の帝展入選作を展示
1936 昭和11 平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1935	昭和 10	熱田神宮御遷座祭の記録絵を丹羽玉邦、森村宜稲、山田秋衛、御遷座祭絵巻を石川英鳳が担当
帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品) 森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			服部有恒が松岡映丘を盟主とする国画院に参加、森村稲門(宜永)も参加
森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住 1937 昭和12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1936	昭和 11	平岩三陽、森田沙伊、横山葩生の三相會展開催/愛土社解散・彩交会結成
1937 昭和 12 名古屋汎太平洋平和博覧会開催 1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			帝展改組に際し、朝見香城、石川英鳳、織田杏逸、浅井正臣、近藤白鳳が不出品を表明(後に再出品)
1938 昭和 13 森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に 1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催			森村宜稲が明治神宮外苑絵画館壁画《農民収穫御覧之図》を揮毫/我妻碧宇が名古屋に定住
1940 昭和 15 森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成 1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1937	昭和 12	名古屋汎太平洋平和博覧会開催
1942 昭和 17 鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催	1938	昭和 13	森村宜稲逝去、森村稲門が画号を宜永に
	1940	昭和 15	森村宜稲門下の服部有恒、林雲鳳、小寺礼三、喜多村光穂(麦子)、森村宜永が大稲会を結成
1943 昭和 18 第 6 回新文展で我妻碧宇《林間》が中京在住日本画家初の特選に	1942	昭和 17	鶴舞公園美術館が解体/名古屋市翼賛文化聯盟結成、構成団体の一つに愛知日本画文化協会、名古屋綜合芸術展開催
	1943	昭和 18	第6回新文展で我妻碧宇《林間》が中京在住日本画家初の特選に



名古屋市美術館

名古屋市中区栄二丁目 17番 25号(芸術と科学の社 白川公園内) TEL 052-212-0001 FAX 052-212-0005 https://art-museum.city.nagoya.jp/